

2008年5月15日

大学生活への期待や不安、現在の社会問題への関心は？

新入生約900名に調査

東洋大学 新入生アンケート

はじめに

東洋大学（東京都文京区 / 学長・松尾友矩）では、今春約7,500人の新入生を迎えました。新しい大学生活を迎えるにあたって、彼らはどのような意識を持っているのか——。本学では毎年、4月に入学した新入生を対象にアンケートを実施しています。今年も大学生活を迎えるにあたっての期待や不安、および、現在、大きな社会問題として取り上げられる「食」「環境」に対する意識について調査しました。また、本リリースではそれぞれについて本学教員のコメントを掲載しております。以下は、集計結果です。

調査概要

- 調査対象 2008年4月に東洋大学へ入学した学生
- 調査日 2008年4月4日
- 調査場所 東洋大学 白山キャンパス
- 調査方法 新入生ガイダンス出席者にアンケート用紙を配布、記入後に回収
回答者自身による直接記入法

■ サンプル数（有効回答数）882人

本リリース内の%の数字について、
小数点第2位以下を四捨五入しております。

	性 別	
	男 性	女 性
人	355	527
%	40.2	59.8

サマリー

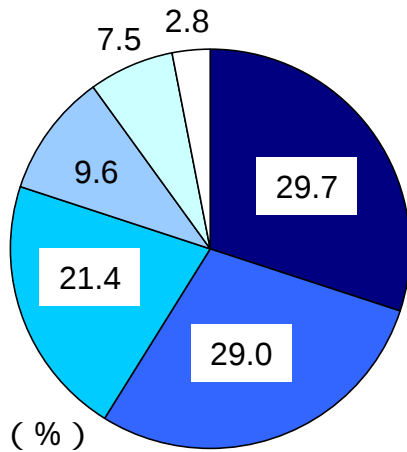
- 大学生活に最も期待するのは「出会い」、最も不安なのは「授業についていけるか」「自分をうまく表現できるか」が大学生活のポイント
- 「賞味期限をチェックする」84%、不祥事の起きた企業の商品は「買わない」70%
目に見える表示から、食をとりまく環境へと視野を広げる必要性も
- 大学入学までに92%が「環境教育を受けた」と回答。
潜在的に持つ環境意識を、生きる力・考える力として育んでゆく大人の働きかけが大切

この件に関するお問い合わせは下記までお願いいたします

東洋大学 総務部広報課 窪園 隆 / 川俣 英里
〒112-8606 東京都文京区白山5-28-20
TEL 03-3945-7571 e-mail mlkoho@ml.toyonet.toyo.ac.jp

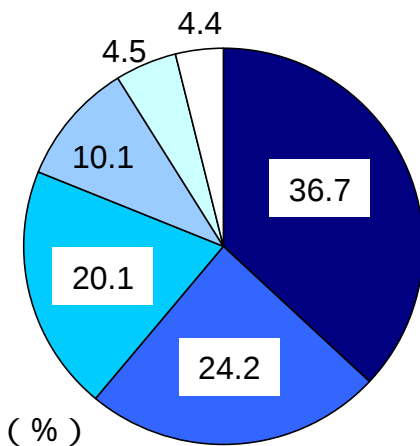
大学生活について

Q 1 あなたが大学生活に最も期待することは何ですか？（１つ選択）



■ 友達や先輩・後輩、先生など多くの人との出会い	29.7%
■ 資格取得の勉強など、将来の進路に向けた準備	29.0%
■ 大学での学習	21.4%
■ 自由な時間を利用した旅行や趣味、アルバイトなど	9.6%
■ 部活動・サークル活動やボランティア活動	7.5%
□ その他、NA	2.8%

Q 2 これからの大学生活で最も不安に思っていることは何ですか？（１つ選択）



■ 大学の授業・学習が理解できるか、ついていけるかどうか	36.7%
■ 仲の良い友達ができるかどうか	24.2%
■ 新しい生活環境に適応できるかどうか	20.1%
■ 自分の「やりたいこと」を見つけられるかどうか	10.1%
□ 大学生活を送るにあたっての金銭的な問題	4.5%
□ その他、NA	4.4%

大学生活に最も期待することは「出会い」、不安に思うことは「授業についていけるか」

期待と不安が交差する新生活のスタート。それぞれポイントの高い「出会い」への期待（Q1 - 1位）や「友達ができるか」（Q2 - 2位）などの不安は、おそらくいつの時代も変わらないものですが、Q1で1位とほぼ同数であった「資格取得の勉強、将来の進路に向けた準備」への期待（Q1 - 2位）や「大学の授業・学習が理解できるか、ついていけるか」という不安（Q2 - 1位）は、それぞれ今の時代を反映している結果と言えるかも知れません。

大学生の“こころ”の事情に詳しい、東洋大学学生相談室の心理カウンセラーにコメントを頂きました。

「真面目」な大学生、多くの悩みを突破するポイントは 「自分を上手く表現できるようになること」

東洋大学学生相談室 須賀 芳枝（すが よしえ）／中村 家子（なかむら やすこ）
〔心理カウンセラー〕

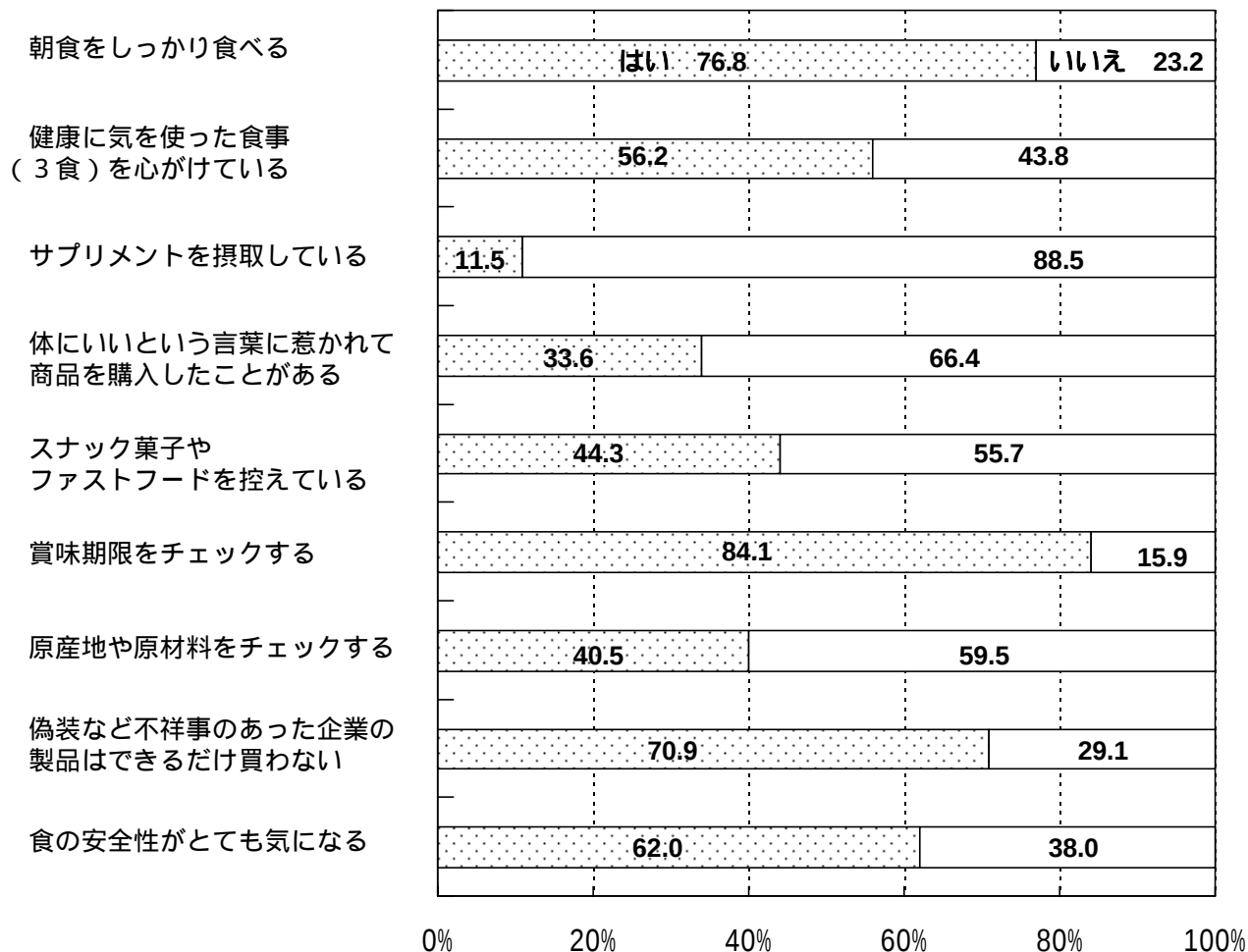
現在の大学生は近年よく言われるように大変「真面目」です。与えられたことをきちんと守り、努力しようとする傾向が強く、出席率の向上などにそれが表れています。これはいわゆる「全入時代」といわれる時代の「大学の学校化」がQ1やQ2の「真面目な」回答を導く一方で、自ら学びとる力が弱くなっているともいことができます。

一見種類が異なると思われる「出会い」「勉強」への不安が顕在化していく過程には、実は共通する背景があります。今の大学生は、育ちの過程で友達や家族と「深く関わる」という経験がないままに過ごしてきた人が多く、その結果、相手に対して「自分を表現する」ということがとても苦手です。そのことが、自分の意見を持ち、発表を求められる大学での学習の中で、苦手意識を増幅させたり、高校までのようなクラスを持たない大学生活で、友達を作ることができないという要因になっていることがままあるのです。

大学ではさまざまなカウンセリングやグループワークを用意し、彼らの悩みをサポートし、自分を上手く表現できるようになるためのトレーニングを行っています。例えば、毎年「夏のコミュニケーショングループ」というプログラム（宿泊を伴う対人関係のグループワーク）を実施していますが、「自分を語ること」「不安を感じること」「不安を語ること」というスリーステップを通じて、「初めて友達と旅行に行くことができた」「どのように人に関わればよいか分かった」と、笑顔を見せる学生がたくさんいますよ。

「食」について ～現在の社会問題から

Q1 下記の問いについて当てはまる方を選んでください。（はい・いいえで選択）



「賞味期限をチェックする」84%、不祥事の起きた企業の商品は「買わない」70%

食の偽装問題、安全性などが大きな社会問題となっている昨今、新入生も賞味期限をチェックしたり（ ）、不祥事を起こした企業の商品を避けたり（ ）と、できる範囲で“自衛”をしている様子です。

「体にいい」というキャッチフレーズによる商品の購入（ ）や、サプリメントの摂取（ ）は少数派であるものの、これまで家庭で食事を摂る機会が多かったためか「健康に配慮した食事」をきちんと摂ってきた様子がうかがえます（ 、 ）。いずれにしても彼らはまだ主として「食べる側」であるため、賞味期限が「安全性」の尺度。これが「作る側」にまわったとき、 のポイントが高くなるのでしょうか、すでに40%の新入生が原産地・原材料をチェックしていることも時代性を表しているかも知れません。

大学生の“食”への関心に詳しい、東洋大学生命科学部の大熊廣一教授にコメントを頂きました。

目に見える「表示」だけでなく

「食」を取り巻く社会へと、関心を拡げることが求められています

東洋大学生命科学部 大熊 廣一 教授（おおくま ひろかず）

〔専門分野：食品工学、バイオセンサ〕

アンケート結果によると、新入生は食品の安全・安心に関わる事項には関心があり、特に賞味期限はしっかりチェックし、健康に気を遣った食事をしていると見えます。しかし、大学生の朝食の欠食率が40%程度という報告もあるので、一人暮らしや外食が増えてもぜひ「健康に配慮した食生活」を継続してほしいですね。近年は、**自炊度がアップ**しているようで、「お昼は自分の手作り弁当」という男子学生もよく見かけます。食べ合わせや栄養など、食を選ぶ力（食の情報判断力）をますます磨いてもらいたいものです。

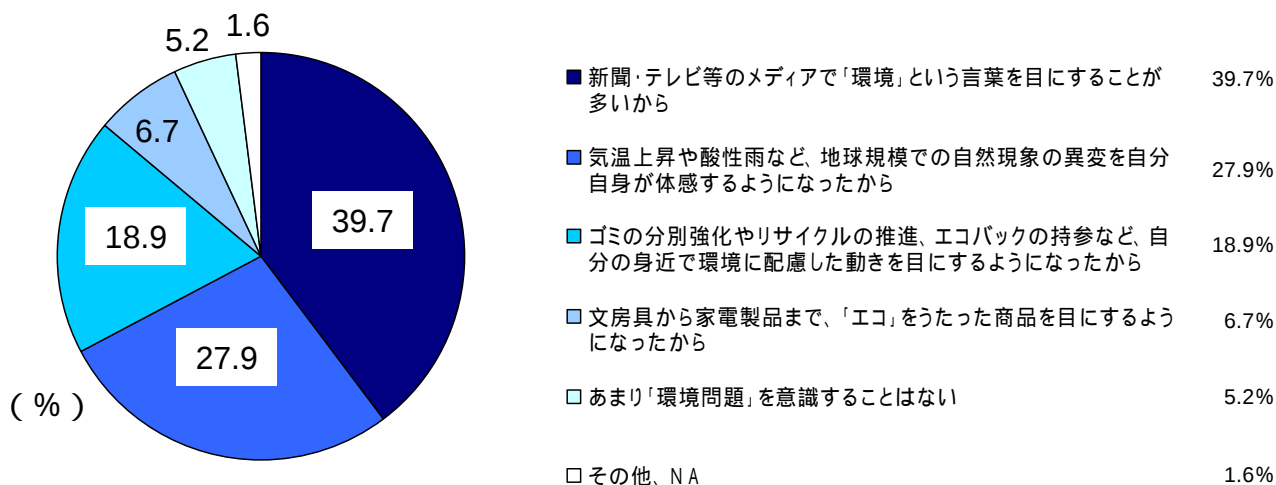
ところが、社会的状況から「食」への関心が高まっている一方で、学生はその食品がどのようにして手元に来たのかという過程をほとんど知りません。それはおそらく大学生のみならず、一般にも当てはまることかも知れません。私たちはとかく「賞味期限」など、目に見えやすい表示のみに関心が行きがちですが、**食に関わる問題**というのは、人をとりまく社会に密接に関係し、地球環境につながる**実にグローバルなものです**。穀物をエネルギーとして使用する「バイオエタノール」などがその代表例といえるでしょう。

私は、授業やゼミを通じて、加工食品の原材料やそれを取り巻く環境、製造工程などを映像で見せ、食に関わる総合的な理解を促しています。

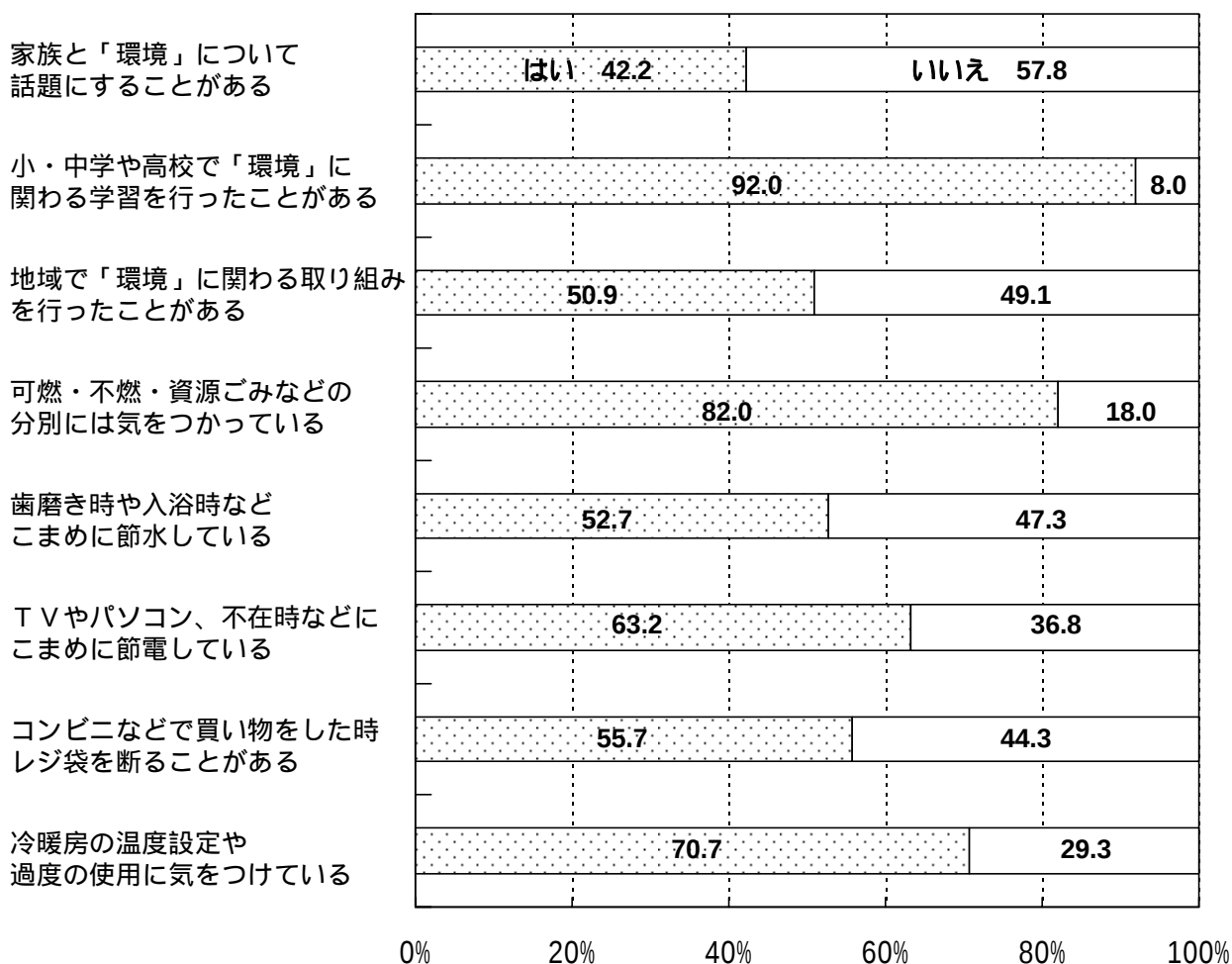
自給率の低さや、生産とその実態、輸入の過程で生じる水資源、燃料など**食をとりまく環境に目を向けることがこれからの時代の必須**です。このことが、地球上での「食の問題」を持続的に解決することになりますし、私たちが「食」を学ぶ際に欠かしてはならないことです。

「環境」について ～現在の社会問題から

Q1 あなたはどのような事柄から環境問題を意識しますか。（1つ選択）



Q2 下記の問いについて当てはまる方を選んでください。（はい・いいえで選択）



学校で「環境教育」を受けてきた現在の大学生。 28%が自然現象の異変を「自ら体感」

アンケート結果からは、これまでに「環境に関わる学習を行ったことがある」学生が92%に上ることが分かりました（Q2 - ）。学校によりその取り組みはさまざまでしょうが、ひとつは2001年度にスタートした新学習指導要領による《総合学習の時間》内で行われてきたと考えられるでしょう。

物心ついた頃から地球環境問題がクローズアップされた時代に育った平成生まれの新入生。コストの“節約”とも類推される「節電」「節水」「冷暖房」（Q2 - ）への配慮が過半数を超えますが、ゴミ分別への姿勢（Q2 - ）やレジ袋を断る（Q2 - ）の高ポイントからは、環境行動の実施が高まっている印象を受けます。「環境教育」を受けてきた彼らの環境への意識とはどのようなものなのでしょうか。

大学生の“環境”への関心に詳しい東洋大学工学部の小瀬博之准教授に、コメントを頂きました。

公共への思いやりを育みつつ

生きる力や考える力を養うためにも「環境活動」を

東洋大学工学部 小瀬 博之 准教授（こせ ひろゆき）
〔専門分野 / 建築環境工学、環境マネジメント〕

アンケートでは平成生まれの学生にして「自然現象の異変を自分自身が体感する」という回答が28%もあることに驚きました。この結果は地球環境問題の深刻さを物語っているように思えます。

工学部のある川越キャンパスでは、温室効果ガス排出量6%削減を目指す「チーム・マイナス6%」に取り組んでいますが、教職員が一丸となって学生の環境意識向上に努める必要性を感じます。環境への意識は個人差が大きく、特に大人であれば所属する事業者、若者ならば模範となるべき大人から大きく影響を受けるからです。

若い世代においては、全体的な環境意識が高まる一方、自分で出したごみは自分で片付ける、自分の身は自分で守るという公共の場所に対する環境への意識は弱まっているのではないかというのが私の見方です。私の授業では「まちの環境改善提案」という課題を出していますが、「**ごみ箱を設置すべき**」「**危ないところには柵を作るべき**」という提案が多く見られます。今の大学生が過ごしてきた時代は、悪化していた都市河川の水質が徐々に改善され、市街化区域の田畑や樹林地が宅地化された時期と重なります。ごみ箱が撤去された経緯や、危ないところに柵がない環境を経験していないために目につくのでしょうか。安全な街は、それを作った大人たちの成果でもありますが、その反面、整備されたまちに住み慣れた彼らの特徴的な感じ方を生み出してもいるようです。

学生には、メディアで取り上げられる環境問題と自分の生活や身の回りの環境がどのように関わっているのかを、自然環境の保全やごみ拾いなどを通して体得し、社会全体に環境活動の環（わ）を広める主導役になって欲しいですね。社会に役立てる実感と、自分の生きる力や考える力を養うのにも「環境活動」は大きな効果があります。